

畢華珍伝稿

千葉謙悟

0. はじめに

畢華珍は清末における文法学者として今後大いに注目される人物である。その著『衍緒草堂筆記』には馬建忠の『馬氏文通』（1899）より少なくとも40年以上早く、西欧言語学式の品詞分類に近い分析が、従ってより近代的とされる文法的思考が見いだされる。畢華珍とその『衍緒草堂筆記』を世に紹介したのはイギリス人來華宣教師エドキンス（Edkins、艾約瑟）であった。彼は伝道の他に中国語の研究にも熱心で、上海方言の文法を記述したEdkins1853では以下のよう述べる。

(1)The native writer (畢華珍。筆者注) just referred to, in a recent work, 衍緒草堂筆記 'ien 'zɔ̃ 't'sau dong pih ki', on the parts of speech and construction of sentences, has extended these divisions, by forming the 虚字 h'ü(sic) zz', or words not substantive, into four classes.

畢華珍はその最近の著作『衍緒草堂筆記』において品詞と文の構造について触れているが、それは「虚字」つまり実名詞ではない語を四つのまとまりに区分するこのような分類にまで達している。

また、内田2005が指摘するように、畢華珍はエドキンスのみならず当時の他の欧米人中国語研究者にも注目された学者であった。例えばBazin1861:XXIV-XXVは以下のように述べる。

(2)Dans son ouvrage, qui a pour titre 衍緒草堂筆記 l'auteur chinois, après avoir parcouru la surface de la langue écrite, examine l'une après l'autre toutes les parties du discours, loin de s'en tenir au train commun et à l'ancienne méthode, ...

『衍緒草堂筆記』という彼の著作において、中国人である著者は書面語の様相を見渡した後に、次々とすべての品詞を分析し、平凡な成果や古いやり方からは大きく踏み越え

ている。

畢華珍の名とその著作『衍緒草堂筆記』はともにエドキンスやバザンといった西欧の学者に知られたものであった。バザンに至ってはフランスにいながら『衍緒草堂筆記』を読んでいたようである。

『衍緒草堂筆記』そのものについての書誌的な解説は内田 2004、2005 に譲るが、その最も重要な点は品詞分類に関する記述である。それは (2) に言うとおりの伝統的な虚詞・実詞による分類を踏み越えたものということができる。

何群雄 2000 によって畢華珍の事績が紹介されると、『衍緒草堂筆記』の所在が探索されることとなったが、中国はもとより漢字文化圏内の主要な場所では発見できなかった。

2003 年、関西大学の内田慶市教授はオーストラリア国立図書館にて『衍緒草堂筆記』を発見した。図書館の目録には『摘録論文浅説』というタイトルで登録されており、書影を見ると「衍緒草堂筆記」という書名に割り注の形で「摘録論文浅説」という別名が記されている。いずれにせよ、これにより『衍緒草堂筆記』の全貌が知られることとなった。その速報が現在内田 2004、2005 にあり参照することができる。前者は書誌情報、後者は文法分析について論じられているが、現在までのところ畢華珍その人についての伝記的研究はなされていない。

そこで本稿では何群雄 2000 によって紹介されて以来折に触れて集めてきた資料をこの機会にまとめ、現在までに明らかにできた範囲内で畢華珍の生平の記述を試みる。畢華珍もまた西学に関連する中国語文法の系譜に位置付けられる人物であり、しかも世代的にはその先駆といえる。また、その中国語文法についての思考が中国語文法の交遊回路を通じて流通していた蓋然性を構想することも今後の研究の進展によっては可能となろう。

なお、この『衍緒草堂筆記』については内田教授より複印の提供をかたじけなくした。かくも貴重な資料を惜しみなく賜ったことをここに記し、あわせて感謝申し上げる次第である。

1. 祖先について

畢華珍についての基本資料の一つは何群雄 2000 にも引用されている王祖畬『宣統太倉州鎮洋縣志』(1919) 卷二十一である。以下に全文を掲げる。(原文の句読および強調は筆者による。以下同)

(3)畢華珍、初名喬珍、字松心¹。憲曾子。少承家學詩古文沈博絕麗、幾突過諸父。遊京師、

¹ ここで畢華珍の字は「松心」であるが、これを記す文献を他に見ない。ほとんどの資料では「子筠」

聲譽大起。中嘉慶十二年舉人、為知縣浙江。罷官後、以詩酒自娛。年七十餘年卒。從子庭杰、咸豐五年順天舉人。女夫趙兆能諸生。詩文能承其學。錢寶琛輯州志、與纂修之役。畢華珍。もとの名は喬珍。字は松心。憲曾の子である。若くして家学を継いで詩と古文を学び、その知識の該博なことと文章の美しさは先代を超えるほどであった。北京に遊学したとき名声が大いにふるった。嘉慶十二年の挙人となり、浙江で知県を務めた。辞職してからは詩酒を楽しみとした。七十歳あまりで没した。從子畢庭杰は咸豐五年の順天挙人である。娘婿の趙兆能は諸生であり、詩文について畢華珍の学をよく受け継いでいた。錢寶琛が州志を編纂する際ともにその仕事に関わった。

畢華珍について述べる論考はおおむねみなこの記述を引用している。しかし、これだけでは畢華珍について重要な情報が一つ欠落しているといわざるをえない。すなわち、何よりも記さねばならないことは畢華珍が乾隆期の高官・学者である畢沅の從孫にあたるということである。このことは他の資料では必ず記述されており、例えば張文虎「懷舊雜記」『舒藝室全集』卷三からもうかがうことができる。

(4) 畢子筠太令、鎮洋人。秋帆尚書從孫。

畢子筠太令は鎮洋の人である。畢秋帆尚書の從孫にあたる。

周知の通り秋帆は畢沅の字である。また弇山とも号した。畢沅（雍正八（1730）～嘉慶二（1797））は鎮洋の人。乾隆二十五年（1760）の状元。官は湖廣總督にまで昇った。經学に詳しく著述多く、また金石にも造詣が深かった。ちなみに畢華珍の号は「少弇山人」であるが、「弇山」を号した從祖父畢沅への意識を感じることができよう。

より正確に畢沅との関係を言えば、畢華珍は畢沅の弟畢瀧の孫にあたる。畢瀧の伝は『清代畫史増編』卷三十四にみえる。

(5) 畢瀧、字澗飛、號竹癡、太倉人。兄沅博綜金石、酷嗜書畫。瀧亦如兄所好、凡遇翰墨精萃、不惜重價購藏。工山水及竹蒼、渾而秀、深得曹云西古法。工詩。

畢瀧、字は澗飛、号は竹癡、太倉の人。兄畢沅は金石に詳しく、書画を熱愛していた。瀧もまた兄の好みと同じように、書画の優れたものに出会うと高い値を惜しむことなく購入

が用いられている。また、『上海縣續志』（1918）卷二十一は「子載」という別の字を載せるが、この字は『採真子論衡』の自序に見える。

し所蔵していた。山水と竹を描くことに優れ、雄渾にして秀逸、深く曹云西の古法を会得していた。詩にも巧みであった。

畢華珍の祖父瀧は字澗飛、号竹癡。科擧では成功を取めることができず、兄が官位を与えようとしたが実際には就かなかったようである。『宣統太倉州鎮洋縣志』卷九では畢瀧に関して以下のように述べる。

(6)…淡於仕宦, 一再應省城不遇, 即棄去。沅為援例銓部郎, 意弗屑也。…年六十五卒。

仕官に関心がなく、何度か省城での試験に応じたが成功せず、あきらめてやめた。畢沅はそこで旧例を利用して部郎にしようとしたが意に介しなかった。…65歳で卒した。

畢瀧はその有閑な立場を生かして書画と金石を趣味とし、それらの収蔵家としても知られていた。彼の著書に『消暑録』二巻があるが、そこには五代から明までの絵画八十種の名が確認できるという。²畢瀧の生没年は不詳であるものの享年は(6)の伝えるように65といわれる。他にも『広堪齋印譜』『広堪齋詩稿』などの著書が伝わる。

畢瀧には繼曾、熙曾、憲曾、耀曾という少なくとも4人の息子がおり、畢憲曾が畢華珍の実父にあたる。その伝は『宣統太倉州鎮洋縣志』卷二十一にみえる。

(7)畢憲曾、字季瑜。父瀧工書畫, 精賞鑒, 家藏甚富。憲曾乾隆六十年舉人。少為外舅顧光旭所賞, 詩文得其指授。弱冠游秦, 謁華陰廟, 郊昌黎體, 成三十韻句, 特險峻。一時名士皆斂手。…性落拓, 家人生產置弗問, 日坐臥一榻讀書飲酒不輟。卒年七十。

畢憲曾、字は季瑜。父瀧は書画に巧みであり、鑑識眼に優れ、家蔵も非常に多かった。憲曾は乾隆六十年(1795)の擧人である。若くして外舅の顧光旭に才能を賞賛され詩文の指導を受けた。若い時に陝西に遊び、華陰廟に謁して韓愈のスタイルにならい三十韻の詩を作ったが、きわめて優れていると同時に難解であった。時の名士たちはみな賛嘆した。性格は豪快かつおおらかで家の事業には目もくれず、一日中榻に座臥して読書と飲酒を愛した。卒年は七十。

畢憲曾、字は季瑜。乾隆六十年(1795)の擧人である。彼も父と同じく官途には就かず、これもまた父瀧に倣って書画金石に没頭した。畢憲曾に詩文の指導を与えた舅の顧光旭は乾隆期の

²『宣統太倉州鎮洋縣志』卷十一。

官僚で江蘇無錫の人。乾隆十八年（1753）の進士。東林書院を数十年にわたり主宰していたことからすれば畢憲曾はそこで学んだ可能性もある。

以上のように、畢家は沅以来書画金石と詩文にすぐれた家系であった。いちいち記述はしないが畢沅の他の兄弟やその次の畢憲曾の世代も同様な教養を有していた。畢華珍もこのような環境の中で伝統的な教養を十分に身につけていったものと思われる。特に畢華珍の直系は祖父も父も官途に就かず趣味の世界に生きていた。後述するように畢華珍も早くに挙人となるものの、仕官を途中で投げ出すことになる。

2. 畢華珍の経歴

2.1. 知県時代まで

畢華珍の生没年は不詳ではあるが、おおよその見当をつけることは可能である。以下彼の経歴を追いながら順にみていきたい。

(3)からうかがえるように、畢華珍は若い時に北京へ遊学している。「遊京師、聲譽大起」という記述は彼が詩文の方面において大いに才能を発揮したことを示す。また、畢家の学と畢華珍の才能については、畢華珍の甥にあたる畢庭杰の詩集『清抱居牘稿』（1887）葉裕仁序に以下のような記述が見られる。

(8) 夫畢氏，自弇山尚書後，風雅承傳不絕，子筠先生尤卓然。

そもそも畢家は畢沅以来風雅の学風が受け継がれ絶えることはなかったのだが、その中で畢華珍先生が最も優れていた。

(3)の記述によれば、畢華珍が挙人の資格を得たのは嘉慶十二年丁卯（1807）の時である。そして挙人合格後、しばらくは教習の職に就いていたことが包世臣「送畢子筠分發浙江知縣序」（『齊民四術』卷八）の記述からわかる。

(9) 子筠以教習期滿，例得知縣，籤摯浙江。

畢華珍は教習の任期が満了し、旧例通り知県の職を得、籤で浙江を引き当てた。

教習は、全国の挙人のうち優秀な者を北京に集め翰林院で教育を施すという目的のもとに設置された官である。従って彼は少なくとも数年の間、北京での生活を経験したということが分かる。それが(3)にいう「遊京師」であろう。

教習の任期が明けてから、畢華珍は浙江省での知県生活に入る。その際に包世臣から贈られたのが前述の「送畢子筠分發浙江知縣序」であった。³

(9)には己卯(1819)の日付があることから、畢華珍が知県として浙江に赴いたのも同じ己卯すなわち嘉慶二十四年、あるいはその翌年あたりのことと推測される。ただ、実際に畢華珍が赴任したことが確認されるのは以下の四つの県にとどまる。

淳安知県

青田知県 道光六(1826)～道光八(1828) 雷銑修・王棻纂『青田縣志』(1880)

龍游知県 道光十五(1835)～道光十七(1837) 余紹宋纂修『龍游縣志』(1925)

慈溪知県 道光十七(1837)～道光十九(1839) 馮可鏞修・楊泰亨纂『慈溪縣志』(1899)

淳安知県の年代が記されていないのは、地方志に記載がないことによる。呉士進修、呉世榮増修『嚴州府志』(1883)によれば、咸豊から同治にかけての戦乱により淳安県の過去の記録が失われたことが記されている。

(10)乾隆二十年以後官師、因咸豊同治間經粵匪之亂、案卷無存、姓名難盡考載、閱時既久、定多闕如、爰就見聞所及並確可指數者、特於卷末續為増補、以俟後之採訪匯成、掛一漏萬、不免貽譏。(卷十一續増)

乾隆二十年以後の役職者については咸豊から同治にかけての太平天国の乱の間に書類がなくなってしまう、姓名をすべて考証し記載するのは難しい。時間もかなりたったので欠けているところも多い。ここに調べが及ぶ限りのところと確認できたところを特に巻末に置いて増補とし、後世の調査を待つ。多く漏れがあることについては決して誹りを免れることはできない。

しかし、ここで手がかりが消えたのかと言えばそうではなく、劉世寧原本、李詩續修、陳中元・竺士彦續纂『淳安縣志』(1884)には嘉慶二十五年(1820)以後に就任した知県の名が記録されていた。これによれば1820年以後の知県については名前と在職期間が判明する。そしてそこに畢華珍の名は現れない。

『嚴州府志』と『淳安縣志』の記載を信じるならば、畢華珍が初めて知県を勤めた場所は淳安県であろうということ、その期間は(9)を贈られた時期と合わせて考えると嘉慶二十四年(1819)

³ 包世臣が挙人を得たのは嘉慶十三年(1808)のことで、畢華珍とほぼ同時である。

から翌二十五年（1820）にかけてであったろうということが推測できる。

淳安知県の任が終わりしばらくの空白期間を経て、道光六年（1826）には青田知県を務めるが、二年後に父憲曾が没する。(7)の記載からわかるとおり憲曾の享年は70である。従ってその生卒年は乾隆二十二年（1757）～道光八年（1828）とすることができよう。服喪を含め7年の間において同じ浙江省の龍游知県を務めるが、これも長くは続いていない。

畢華珍の最後の知県職は慈谿知県であった。そしてこれがおそらく彼の最後の官職であったと思われる。道光十八（1838）年に職を辞して以後、彼は祖父や父のように自適の生活に入ったからである。従って東西言語文化交流史における彼の活躍もその時期のものとなる。

2.2. 著述時代

彼が再び記録に現れるのは十年後である。道光二十八年（1848）、畢華珍は最も一般に知られた代表作『律呂元音』を著す。彼の楽律についての学識が十分に発揮されたこの著は非常な評判を呼び、張文虎はこれを『小萬卷樓叢書』に収めた。現在最も流布している版本は『叢書集成』に収められたこの小萬卷樓叢書本であろう。畢華珍の後半生はこの張文虎および李善蘭との関係で現れてくる。

張文虎（嘉慶十三年（1808）～光緒十一年（1885））は字孟彪、号嘯山、江蘇南匯の人。経学や詩文に優れ、託されて『守山閣叢書』『小萬卷樓叢書』などを校勘したが、一方で算学や楽律にも詳しく、その点で李善蘭を介して西学との接点もあった。後に曾国藩に招かれてその幕僚となっている。

李善蘭（嘉慶十六年（1811）～光緒八年（1882））は字壬叔、号秋纫、浙江海寧の人。清末の数学者として著名である。メドハースト（Medhurst、麦都思）の墨海書館に出入りし、ワイリー（Wylie、偉烈亞力）とともに『續幾何原本』や『談天』を翻訳したことは有名な事績である。後に京師同文館に算学教習として招かれた。

また李善蘭とワイリーとの共訳『幾何原本』金陵書局本には曾国藩の序があるが、これは実際には張文虎が代筆したものである。曾国藩の幕僚が集まる南京の金陵書局において李善蘭と張文虎は同僚でもあった。『張文虎日記』を見ると張文虎が連日李善蘭と行動をとともにしている様うかがえる。

彼らを畢華珍と結びつけたのは算学であり、彼らの交友はそこからスタートしたものであろう。畢華珍の事績は張文虎や李善蘭との関係からある程度うかがうことができる。またエドキンスら宣教師と畢華珍の間に交友があったとすれば、李善蘭を介してのことであった可能性が高い。

張文虎の尺牘「與李壬叔」（『舒藝室尺牘偶存』）では以下のように述べる。

(11)上月望艾君見訪,弟適先。五日南旋。恨未一晤。…江氏數學,曉庵新法,五星行度解三種,希致艾君,雖在今日以為吐棄之餘,然秣算之理,不厭參詳或可資旁涉。重學曾否授梓。微分法凡幾卷,中西通書誤字頗多,日過最高距夏至至四十七日尤為顯謬,亟互改正。綠卿欲覓四五尺長遠鏡,有否。朱述翁,畢筠翁消息若何。風便示及。

先月十五日にエドキンス氏が尋ねてきたらしいが私は先に遠出していた。五日に南に帰ってきた。いまだ会えていないのは残念だ。…江永の『數學』、王錫闡の『曉庵新法』⁴『五星行度解』の三種をエドキンス氏に渡したい。今日では役に立つまいが、歴算の学の真実について面倒がらず詳しく参照し調べれば役に立つところもあるかもしれない。『重学』はもう出版したのだろうか。『微分法』『中西通書』⁵には誤字が非常に多い。「太陽が最も高いところをよぎること夏至から47日に到る」というのは最も明らかな誤りなのですぐ直した方がよい。韓応陞が四、五尺の望遠鏡を欲しがっているがそちらにあるだろうか。朱術之翁や畢華珍翁の消息はどうなっているだろうか。ついでに教えてほしい。

この手紙は癸丑年(1853)の日付があるので李善蘭が嘉興にいたころである。李善蘭が1855年以前に嘉興にいたということは張文虎の「嘉興襍詩」其十により判明する。

(12) 嘉興襍詩(乙卯九月借錢叔保再寓幻居庵)⁶

其十

一鶴東飛無短李(李善蘭壬叔昔館禾城、今遊滄瀆)

孫郎閉戸學維摩(孫融久病不出)

少年別有陳驚座(陳鴻浩曼壽)

肯逐閒鷗日至麼

鶴が一羽東へ飛んでいった。「短李」と綽名された李紳のように背の低く太った李善蘭は

⁴『王曉庵歷法』のことだと思われる。ここにある三種はいずれも張文虎が校訂した『守山閣叢書』所収の数学書である。

⁵『中西通書』は中国とイギリスの暦を対照させたものにいくつかの伝道文書や西学書を付したもので、暦という性質上毎年一回、1852年から少なくとも1865年まで出ている。ここでいう『中西通書』が1853年版であるとする、その中国語文言の潤色者は王韜である。『中西通書』1853年版については内田2004参照。

⁶ 引用文中の括弧は原文の割注部分である。

東のかた上海に移ってもういない。（李善蘭（壬叔）は昔嘉興に住んでいた。今は上海に移っている。）

孫澍は門を閉ざし仏道を学んでいる。（孫澍は病気で長いこと外出していない）

年は若い「陳驚座」こと後漢の陳遵のような才を持った陳鴻浩がいる。（陳鴻浩、字は曼壽）

隠居した人をあえて追いつか会いに行くことがあるのだろうか。

乙卯は 1855 年である。そしてちょうど畢華珍もこのころ嘉興に寓居していた。そのことは『清儒學案小傳』巻十八にある。

(13) 畢先生華珍

畢華珍先生字子筠，鎮洋人。道光□□舉人。官浙江慈溪知縣，以病乞歸。僑居嘉興，杜門著述，邃於音律之學。…

畢華珍先生は字子筠、江蘇鎮洋の人。道光□□年の舉人である。官は浙江慈谿知縣だったが病気を理由に辞職した。嘉興に移り住み、著述に励み、音律の学に詳しかった。…

なお、『清儒學案小傳』が畢華珍を「嘯山學案」に入れて張文虎と同じ學案においていることは二人の立場あるいは関係をよく示すものであろう。李善蘭はこの後上海に移り王韜と墨海書館で同僚となる。

エドキンスとの交流は何群雄 2000 が推測するように李善蘭を介して始まったと思われる。李善蘭は 1852 年に初めて上海の墨海書館を訪れ、エドキンスやワイリーらと親交を結んだ。その後エドキンスは畢華珍の著作を評価し、冒頭に見たように Edkins1853 で紹介したのである。

他にも 1850 年代後半まで畢華珍が生存していたことを示す記事がある。畢庭杰『清抱居賸稿』（1887）には老境の畢華珍をうたう。

(14) 客中奉懷伯瑜中丞子筠伯

二老吟詩鬢雪侵	二老詩を吟じて 鬢雪侵す
三千里外是知音	三千里外 是れ知音
獨居南阮書懷富	南阮に獨居して 書懷に富む
不學西崑辨體深	西崑を學ばざるも 體を辨ずること深し
梁父欲暝頻畫掌	梁父暝せんと欲して 頻に掌を畫す

滄江無浪自鳴琴 滄江浪無く 自ら琴を鳴らす
 弁西茶話終相憶 弁西の茶話 終に相ひ憶ひ
 石鼎鑪煙細細尋 石鼎の鑪煙 細細に尋ぬ

二人の老人は詩を吟じる 鬢の毛もすっかり真っ白である

故郷からはるか遠くにあってもお互いは知音の仲である

貧しく暮らしているが政見には富んでいる

西崑体をまねることなく 詩を深く論じる

梁父山に日が没せんとしているように老境に達しているが 南齊の蕭擘が掌に字を書いて練習し篆書を極めたように学び続けている。

波もなく川は流れるように世を平和にし 知県としてよい治績をあげた。

かつてした太倉の弁山での茶話を思い

陶製の茶器からたちのぼる細い煙のあとを見守っている

この詩は編者の繆朝荃によれば丙辰（1856）秋の作である。作者の畢庭杰は字雄伯。畢華珍の甥に当たる。咸豐五年（1855）の順天挙人。畢華珍に詩文を学び一族中の秀才として期待されたようであるが、1856年に北京から帰郷した直後に急逝した。40歳に達していなかったという。⁷詩文は3000首あまりあったというがみな戦乱で失われ、『清抱居贖稿』に収録されているのはわずかに96首である。このことを葉裕仁は「益為子筠先生惜也（ますます畢華珍先生のために惜しまれるのである）」⁸と述べる。

また、丁巳（1857）の日付がある張文虎から畢華珍宛の手紙でも畢華珍がまだ健在であったことが確認できる。⁹

(15)前承手教、竝眎音學心髓圖、鹿鹿未裁荅。上月章之兄枉顧欣審起居康健…

以前親しく教えを蒙り、かつ『音學心髓圖』をお見せ頂きながら忙しさゆえ御返事もしたためておりませんでした。先月章之兄にわざわざおいで頂き、先生が日々ご健康であることを喜んでおりました。…

⁷『清抱居贖稿』陸增祥序。

⁸『清抱居贖稿』葉裕仁序。

⁹ 小万巻楼叢書の『律呂元音』の末尾にこの手紙が付されているが、張文虎の文集である『舒藝室尺牘偶存』に載せる「與畢子筠大令」とは若干の異同がある。ここでは『舒藝室尺牘偶存』のテキストを用いる。

1857年の段階ではまだ畢華珍が存命、かつ健康であったであろうということが推測できる。何群雄 2000:133 では舒位『乾嘉詩壇點將録』（1907）を引用して少なくとも1858年までは存命であったと記しているが、それを裏付けることになろう。

父の畢憲曾の生没年が乾隆二十二年（1757）～道光八年（1828）と推定できることからして、畢華珍の生没年はおそらく乾隆五十年（1785）？～咸豊十年（1860）？あたりと推測できるであろう。その享年が(3)によれば「七十餘」であることも参考になる。

畢華珍は嘉興に死ぬまで寓居しており、時々上海に出てくる他は嘉興で著述に専念していたようである。¹⁰(14)からも故郷の太倉には帰っていなかったことが窺われよう。

畢華珍よりも一世代下の張文虎が畢華珍の晩年を回想した詩が残っている。

(16) 秋日懷人詩其二 畢華珍¹¹

四壁蕭然舊使君	四壁蕭然たり 旧使君
草亭寂寞著元文	草亭寂寞 元文を著す
金陀園畔多遊客	金陀園畔 遊客多し
誰向斜橋訪子雲	誰か斜橋に向いて 子雲を訪わん

草堂の壁は静かに もと知県の畢華珍がいる

淋しげな草堂から名著を送り出した

岳珂の別荘たる金陀園のあたりには観光客が多いけれども

誰が嘉興の斜橋に 門を閉ざし著述に専念した漢の揚雄のごとき畢華珍を尋ねると
いうのであろうか

3. 『衍緒草堂筆記』と東西言語文化交流の回路

「衍緒草堂」という畢華珍の草堂名は彼の資料中には現れない。おそらくは故郷太倉の邸宅の中の一つであったろう。嘉興時代の畢華珍の邸宅名として伝わるのは「梅巢居」であり、嘉興にあった畢華珍の書齋名である可能性は低い。

『衍緒草堂筆記』の後に付されている「四言格句」という著作を見るとその第一葉第一行に「婁東畢氏家塾訂本」とある。「四言格句」は文言的な四言句を複数取り上げ、その構造を『衍緒草

¹⁰ 門弟の教育はしていたようで、主な弟子として秦次游（字光第）、錢曉廷（字聚朝）の名が伝わる。前者は書に優れ、後者は篆刻に秀でていた。張鳴珂『寒松閣談藝瑣録』巻一参照。

¹¹ 張文虎「舒藝室詩存」四、『舒藝室全集』第六冊。

堂筆記』の品詞分類に従って分析し類型化を図った著作である。

「婁東」とは婁江（下江）の東のことであるから、もしこの「四言格句」と『衍緒草堂筆記』が同時期のものであるとすれば、ともに畢華珍の故郷太倉で出された可能性が高いことになる。婁江は江蘇昆山や太倉を経由して長江に注ぐ河だからである。また「四言格句」の「婁東畢氏家塾訂本」という文言からすれば、畢華珍は官を辞してからは家塾を開いていたようである。

李善蘭の紹介を経て畢華珍と来華宣教師との間に交流が生まれたとの推測が正しければ、エドキンスが『衍緒草堂筆記』の存在を知ったのは李善蘭が墨海書館を初めて訪れる1852年6月以降のことになる。李善蘭は早い段階で畢華珍の業績をエドキンスに知らせたことになろうが、この場合エドキンスは一年ほどで『衍緒草堂筆記』を読破し高い評価を与えたことになり、¹²著書に反映させるには時間的余裕が少ないようにも思われる。『衍緒草堂筆記』を最も早くに引用しているEdkins1853が1853年の出版であることを考えれば、『衍緒草堂筆記』はその数年前には完成していたと見るべきかもしれない。

ならば畢華珍は独力で『衍緒草堂筆記』に見られるような斬新な品詞分類を構想したのであろうか。あるいは李善蘭を介することなくエドキンスをはじめとする来華宣教師とのつながりを得、そこでの交流から啓発を受けたのだろうか。¹³現在明確な解答を提示しうるわけではないが、ここでは早い段階から畢華珍が西学と接していたと思われる例の一つ挙げたい。

畢華珍の著作の一つに『採真子論衡』がある。時弊とその対策を論じた政論書であるが、中に「ママ雅片漏銀後議三」という文章が収められている。鴉片貿易による漏銀よりも商品作物の栽培の拡大と人口増による将来の食糧不足の方を優先して対策すべきであることを説いている。議論のために畢華珍は中国国内の可耕地を概算しているが、そのときに「以北極出地度定里數之遠近最為得實（北極からどれだけ離れているかによって里數の遠近を定めるのが最も確実である）」¹⁴と述べているのである。このように北極という定点から（あるいは赤道から）の度数を用いて地理的位置を示す方法はそれまでの中国で一般的とはいえないものであった。おそらくはここに畢華珍における西学受容の一端を見ることができるのであるが、注目すべきはこの「雅片漏銀後議三」の書かれた年代が戊戌年、すなわち1838年であるということである。

¹² しかしエドキンスは畢華珍のことについてEdkins1853に触れるのみで、マンダリンについての文法書であるEdkins1856になると畢華珍の名は一切現れなくなる。このことについては後考に俟つ。

¹³ 王韜の父王昌桂は1847年末の墨海書館開設の最初期から宣教師に雇われ漢文文書の潤色に従事していた。年代的にも畢華珍と同世代であり、王家は蘇州甫里の人であることから太倉の畢華珍とは比較的近い。畢華珍が李善蘭によるよりも早く来華宣教師と接触した可能性の一つたりうるかもしれない。

¹⁴ 『採真子論衡』「雅片漏銀後議三」。

鴉片戦争以前に緯度を使って地理的位置を示していた西学文献と言え来華宣教師による漢文雑誌『東西洋考毎月統記傳』の丁酉七月（1837）号に載せる地理関係の記事やブリッジマン（E. C. Bridgman、裨治文）によるアメリカ合衆国の概説書『美理哥合省国志略』（1838）などがある。一つの可能性としてであるが、畢華珍はこうした文献を通して西学を受容していったことが示唆されよう。

むろん西学文献を入手する回路と畢華珍はどのようにつながっていたのかをはじめ、残されている課題は多い。また、畢華珍と来華宣教師との最初の接触を示す直接的な証拠は現在までのところ得られておらず、すべて今後の課題である。

<参考文献>

何群雄 2000. 『中国文法学事始』。東京:三元社。

内田慶市 2004. 「最近目にした「西學東漸」と言語文化接触に関する書物」、『或問』7、95-103 頁、東京: 白帝社。

———内田慶市 2005. 《马氏文通以前中国人的语法研究 —关于毕华珍衍緒草堂笔记的品词分类法—》、《关西大学中国文学会纪要》26、23-34 頁。

（清）包世臣、潘竟翰點校 2001. 『齊民四術』。北京:中華書局。

（清）畢華珍 『採真子論衡』。

———1848. 『律呂元音』（「小萬卷樓叢書」、『百部叢書集成』）。台北:藝文印書館 1966。

——— 『衍緒草堂筆記』。

（清）畢庭杰 1887. 『清抱居牘稿』。

（清）馮可鏞修・楊泰亨纂 1899 『慈溪縣志』（中國方志叢書 華中地方第 213 號）。台北:成文出版社。

（美）高理文 1838 『美理哥合省國志略』。新嘉坡:堅夏書院。

黃時鑒整理 1996. 『東西洋考毎月統記傳』。北京:中華書局。

（清）雷銑修・王棻纂 1880. 『青田縣志』（中國地方志叢書 華中地方第 205 號）。台北:成文出版 1970。

（清）劉世寧原本、李詩續修、陳中元・竺士彥續纂 1884 『光緒淳安縣志』（中國地方志集成 浙

江府縣志輯 10)。上海書店 1993

盛叔清輯 1922『清代畫史增編』(清代傳記資料叢刊 78)。台北:廣文書局。

(清)舒位 1907『乾嘉詩壇點將錄』(近代中國史料叢刊第 7 輯)。台北:文海出版社 1974。

(清)王祖畬纂修 1919『宣統太倉州鎮洋縣志』(中國地方志集成 江蘇府縣志集 18)。南京:江蘇古籍出版社

(清)吳士進修、吳世榮增修 1883『巖州府志』(中國方志叢書 華中地方第 55 號)。台北:成文出版社 1970。

(清)吳馨等修、姚文琅等纂 1918『上海縣續志』(中國方志叢書 華中地方第 14 號)。台北:成文出版社 1970。

(清)徐世昌纂、周駿富編『清儒學案小傳』(清代傳記資料叢刊 7)。台北:明文書局。

(清)余紹宋纂修 1925『龍游縣志』。

(清)張鳴珂 1908 序。『寒松閣談藝瑣錄』(清代傳記資料叢刊 74)。台北:明文書局。

(清)張文虎 1893。『舒藝室全集』。

(清)張文虎、陳大康整理 2001。《張文虎日記》。上海書店出版社。

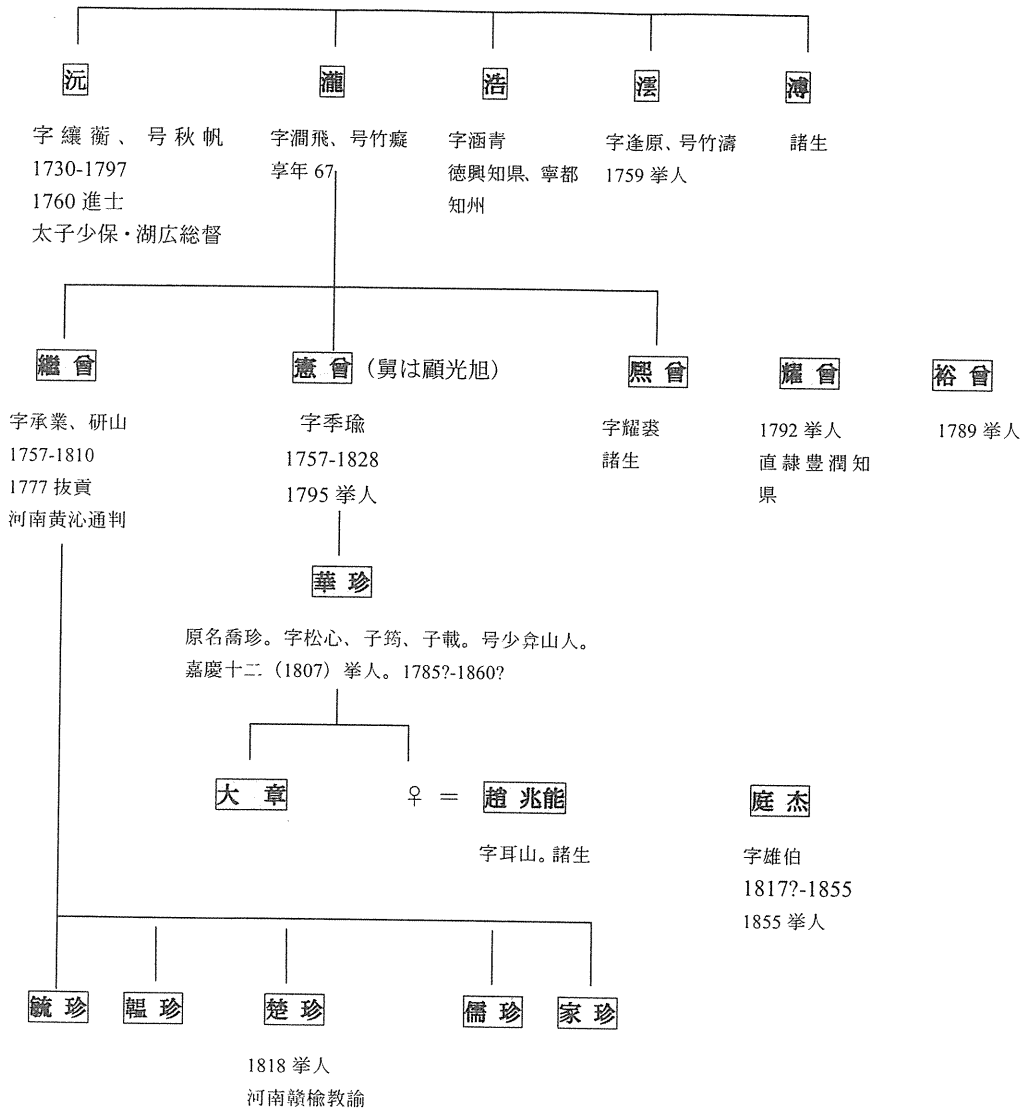
Bazin, M. A. 1861. *Grammaire Mandarine, ou principes généraux de la langue chinoise parlée*. Paris: Imprimé par autorisation de l'empereur, à l'imprimerie impériale.

Edkins, Joseph 1853. *A Grammar of Colloquial Chinese as Exhibited in the Shanghai Dialect*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

——— 1857. *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

附：畢家略系図、畢華珍著作

畢家略系図¹⁵



¹⁵ 縦線で結ばれていない人名は親子関係が明確でないことを示す。なお、横に並列した人物と同世代である。

著作一覧

書名	卷数	刊年	典拠
『律呂元音』	不分卷	1848	『太倉州志』卷二十五
『採真衡論』	十二篇 ¹⁶	1838 以後	『太倉州志』卷二十五
『用兵異宜』	二篇	?	『太倉州志』卷二十五
『少弁山人詩初録』	?	?	『太倉州志』卷二十五
『少弁山人詩二録』	?	?	『太倉州志』卷二十五
『少弁山人文集』	?	?	『太倉州志』卷二十五
『梅巢雜詩』	?	?	『太倉州志』卷二十五
『揖山樓詩集』	?	?	『乾嘉詩壇点将録』
『衍緒草堂筆記』	不分卷	1853 以前	オーストラリア国立図書館蔵本

¹⁶ 京都大学人文科学研究所蔵の書は『採真子衡論』に作る。